



## 「首長と議会は車の両輪だ」

名古屋市会服部議長が講演

第42回東海財界倶楽部例会を開催

中部財界フォーラム社は10月28日、名古屋・東桜のホテルオークラレストランで第40回東海財界倶楽部を開いた。名古屋市会議長、服部将也さんが1999年4月、名古屋市議初当選以来、連続6期務める市議会議員生活について語った。

市議になったのは、市議を9期務めた父親が、心筋梗塞で倒れたのがきっかけ、という。当時、財団法人職員だったが、「お前やれ」と言われた。しかし、生まれた時からプライベート時間のない市議としての父の姿を見ていた。世襲批判もある。悩んだが、地域に期待され、地域の声を伝えていくことはとても大切な仕事。「有権者の判断に委ねよう」と立候補の意志を固めた。

そして今年で23年目。名古屋市会は「荒れる市会」と言われ、予算案の修正など珍しくないが、松原武久市長までの10年間は比較的落ち着いていた。行政の勉強や内情をじっくり知ることが出来た。だが、後半の10年は河村市政で革命的な変化が起き大変だった。市会は旧態依然、と批判された。自分とは視点を全く異にする河村氏。ユニークな人柄で個人的に仲は悪くないが、あの手法には付いていけない。

確かに市会の「当たり前」をゼロベースで考え直すいい機会になった。だが、市民の信任を得た市長が居れば十分で市会は不要、とまで言われると議会制民主主義でなくなる。「首長と議会は車の両輪のはず」と強調する。

市会での質疑も事前に通告や調整があり「茶番だ」と批判されるが、いきなり市当局に問いただしてもその場で答えが出るはずもなく、「限られた時間で一定の結論を出す議会にとっては必要な事」。

名古屋市会は戦後の一時期を除いて単独過半数を占めた会派はない。2会派でもダメで3派連合を組まないとまとまらない。大変な緊張感を生み市当局も神経を使う構図は、「議会としては良いのではないか」と思っている。

議員個人として心がけているのは「自分の意見を信念をもって述べ、理解していただく。支持者だけを見るのではなく反対意見も尊重する心を持って総合的に判断すること」という。しかし、それは現実には容易でなく、幅広い視野と相当な胆力が要ると実感している。

市政の将来に心配なことがある。市議の成り手が減っていることだ。昭和時代は定数7の区に10数人が立候補したのに平成以降は定数プラス1くらい。社会が豊かになり「任せておけばいい」と思うようになったのか。街頭演説でも「高齢者は聞いてくれるが、若い人はあまり足を止めない」と話す。

「政令市名古屋は、起床から就寝中も24時間動いている。水道、道路、バス・地下鉄、ごみ、救急・消防など。だから市会の責任は小さくない」——講演の最後に服部氏はこう言って、改めてベテラン議会人としての覚悟を披露した。